

万葉集に於ける虚字の効用

瀬古, 確
熊本大学教授

<https://doi.org/10.15017/12360>

出版情報 : 語文研究. 6/7, pp.83-90, 1957-12-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

萬葉集に於ける虚字の効用

瀬古 確

万葉集の形式面の美しさとしてその用字の作用してゐる事は見逃す事の出来ない一つの事実である。従来用字法の研究は単にその用字の一字一字についての考察に留まり、一首全体の文字の用ゐる方とか、近接の歌との対比に於いて之を考察したものはあまり見受けられないやうである。

こゝに論じようとする虚字の利用については早くも吉沢義則博士が「万葉集に於ける文字の文学的用法に就て」^(註二)として少しく触れてをられる所がある。即ち博士は

和銅四年歲次辛亥河辺宮人姫島松原見孃子屍悲歎作歌
二首(万二)

の詞書のある

妹が名は千代に流れむ姫島の小松が末に蘿むす万代に
難波漏汐干な有りそね沈みにし妹が光儀を見まく苦流
思も(傍線筆者)

なる二首を挙げ

右第一歌のマデといふ助辞に「万代」の文字の書かれ
てあるのも、文字によつて永久にの意味を響かせよう
としたものと見てよからうと思ふ。この「万代」は一
方に於て「千代」に対する対語としようとしたもので
ある事は勿論である。

とし、

第二歌の「苦流思」の仮名に苦とか思とかいふ文字を
用ひたのにも副次的な意味が考へられていたのでは無
からうか。また流の文字にも水死の心持が動いている
のでは無からうか。

とも言はれてゐる。吉沢博士によつては、前掲の二例しか
挙げられてゐないけれども、このやうに虚字として用ゐら
れたものの中に、文字面から感ぜられる視覚性を極度に利

用したものの多い事は万葉の用字の著しい傾向のやうに思はれるのである。

二

例へば

河上乃湯都盤村二草武左受常丹毛翼名常処女煮手
(卷一・二二)

には処女(実語)から煮手(虚語)への接続において関連の文字美を發揮してゐるやうであるし、更に

楽浪之思賀乃辛崎雖幸有大宮人之船麻知兼津(卷一・三〇)

姦女乃袖吹反明日香風京都平遠見無用爾布久(卷一・五一)

旅爾之而物恋之伎乃鳴事毛不所聞有世者孤悲死万思
(卷一・六七)

如此許恋乍不有者高山之磐根四卷手死奈麻死物乎(卷一・八六)

などの如く船と津のひびき合の感ぜられるばかりか、「風」は「香」の字を伴ふ事によつて姦女の袖を吹いて来た匂ひやかさを連想せしめるに足るものがある。六七には恋と孤悲とを用字を異にして一方は実字として一方には虚字とし

て変化を求めてゐるばかりでなく、孤とか悲とかの文字面からとかく恋の内容を暗示しがちであり、「万思」も亦虚字でありながら思ひ乱れる恋の一面を現しえて妙である。又八六の歌に実字の死と虚字の死とを繰り返して用ゐる所にも作者の死を決意してゐる様子をまさしくと示すのに効果があるやうに思はれるのである。

而して「孤悲」なる用字は恋の性質の一面を髣髴せしめるためか、集中好んで用ゐられてをり、三・四・九・十五の卷はもとより、十四の東歌にさへこの用例を発見するのであり、更に卷十七には集中最も多くの「孤悲」の語を数へるのである。十七の巻が借音中心の巻でありながら、猶「孤悲」なる語を十四回も好んで用ゐてゐるのは借音中心の時代と雖も、意字としての漢字の効用を捨て去るのには忍びなかつたためであらう。彼等は借音のうちにも亦文字面から感ぜられるその文字本来の意義を特定の文字には強く背負はずにはをかなかつたのである。

宇陀乃野之秋芽子師弩芸鳴鹿毛妻爾恋楽若我者不益
(卷八・一六〇九)

なる歌には恋の「樂しみ」と「苦しみ」との両面を思はせるやうな文字の配置さへ見られるのである。

このやうに「恋楽苦」と恋の樂しみと苦しみを対照して示した文字の配置の見られるばかりでなく、その各の

「恋楽」とか「楽苦」なども亦同様に「コフラク」と訓ませて、恋の楽しみ、恋の苦しみをそれぞれ暗示しているのも、面白い文字の用ゐ方と思はれるのである。即ち

吾妹子吾恋楽者水有者之賀良三超而応逝衣思（卷十
一・二七〇九）

白細砂三津之黄土色出而不云耳衣我恋楽者（全上・二
七二五）

などは前者の例であり、

第花拔浅第之原乃都保須美礼今盛有吾恋苦波（卷八・
一四四九）

は後者の例である。ここにもわれわれは「恋楽苦」とか「恋楽」「恋苦」の文字面を通して、恋の明暗二方面をそれぞれ味はふ事も出来さうであり、万葉人の苦心の表記のほどをなつかしきにはをられないのである。或いは

古爾恋流鳥鴨弓絃葉乃三井能上従鳴渡遊久（卷二・一
一一）

には古を偲ぶかの如くゆつくりたもとほりつつ飛んでゆく様
が思ひやられ、

烝被奈胡也我下丹雖臥与妹不宿者肌之寒霜（卷四・五
二四）

には虚字の霜によつて一入と寒い夜を思はせる力がある。

又

味酒之三毛侶乃山爾立月之見我欲君我馬之音曾為（卷
十一・二五一一）

白細之袖者間結奴我妹子我家当平不止振四二（卷十
一・二六〇九）

などの如く「君」を虚字の「我」で上と下から包んだもの
とか、「妹」を実字の「我」と虚字の「我」とで囲んで
るものもある。共に君とか妹とかを大切にしている様子
がその文字配置から窺へるやうな気がする。

この事は又借音中心の時代においても見られるのであり
餘呂豆代爾許己呂波刀氣底和我世古我都美之手見都追

志乃備加爾都母（卷十七・三九四〇）

和我勢故我布流伎可吉都能佐久良婆奈伊麻太敷布売利
比等目見爾許爾（卷十八・四〇七七）

和我勢故我夜度乃也麻夫佐佐吉豆安良婆也麻受可欲波
牟伊夜登之能波爾（卷十二・四三〇三）

などの如く、「世古」とか「勢故」とかを虚字の「我」で
上と下から囲んでゐるものが多く見受けられるのであつ
て、借音中心の時代には単に文字を借用してゐるに過ぎな
いものと見られがちであるが、實際は虚字の用ゐ方にもこ
のやうな技巧——それも正訓中心の時代と全く同じ手法の
数多く見受けられる事は特に注目せられねばならない事実
であり、ここにもわれわれは借音中心の時代にあつてさへ

用字の視覚性に深く意を用ゐてゐるのを見逃す事は出来ないのである。

更に

波瀾縞今為妹之浦若見咲見愠見著四紐解(卷十一・二

六二七)

にあつてははねかづらを附けたばかりのうら若い妻と作者との視線の一致が何度も用ゐられた虚字の「見」によつて示されてゐるやうにさへ思はれるのである。或いは

於保吉美乃美許等加之古美於保乃字良乎曾我比爾美都

々々美也古敏能保流(卷二十・四四七二)

には虚字の「都」を二度繰り返して、そのすぐ後に「美也古」を仮名書で示してゐるばかりでなく、「美」といふ字を五回も使用し、しかも「都々」の前後を「美」で囲んでゐる所にも、咲く花の匂ふが如き美しい都にあこがれる鄙にある官人達の氣持を巧みに現してゐるやうな文字の配置と言ふべきである。

以上によつても明かな如く、正訓中心の用字法の時代に文字の視覚性を極度に利用したものの見られるのはもとより、借音中心の時代にさへ視覚的な効果を窺つたものが数多く見られる事実は万葉人の意字としての漢字に対する愛

著の強さを物語るものではないかと思はれるのである。

三

この事は又借音中心の用字の中にも所々に正訓をちりば

め

多麻久之氣敷多我美也麻爾鳴鳥能許慮乃孤悲思吉登岐

波伎爾家里(卷十七・三九八七)

於等能未爾伎吉底目爾見奴布勢能字良乎見受波能保良

自等之波倍奴等母(卷十八・四〇三九)

多知波奈能美衣利乃佐刀爾父乎於伎弓道乃長道波由伎

加弓努加毛(卷二十・四三四一)

などの如く、そこに重点をおいたやうな用法も見受けられるのである。しかもそこに用ゐられてゐる実字は比較的平易な文字が多いのであつて、漢字の仮用せられたものの中における文字としては如何にも適切な工夫と考へられるのである。彼の数字の用法の目立つのと共に平易な漢字は借音中心の時代にあつても、猶実字として用ゐられずにはをられない所に、意字としての漢字をどこまでも利用する事を忘れなかつたものと見るべきである。

而して「見」とか「花」とか「水」とかの如く借音中心の時代にも永く用ゐられた平易な実字をもかなぐり捨てて

乎之能須牟伎美我許乃之麻家布美礼婆安之婢乃波奈毛
左伎爾家流可母 (卷二十・四五一一)

伊蘇可氣乃美由流伊氣美豆伏流麻濕爾左家流安之婢乃
和良麻久乎思母 (同上・四五一一)

の如く画数の多い仮名を用ゐたり、一字ですむのをわざわざ「波奈」「美豆」などと書記するに至つては、文字面から感ぜられる句とか趣とかは殆んど後退して、ひたすら仮名の發生に備へる結果となるのである。

しかし一方においては又同じく借音でありながらも、元の字を連想させるやうな用法のある事は既に前に述べた所であるが、それらは特にある特定の語に限られて慣用せられたらしい事は

和我於毛波奈久爾 (卷十四・三三九二)

久都波氣和我世 (三三九九)

和我吉奴爾 (三四三五)

和我乎礼婆 (卷十五・三七〇七)

和我袖波 (三七一一)

和我許呂母且乎 (三七一二)

伊波敝和我勢古 (三七七八)

今日曾和我勢故 (卷十九・四一五三)

和我都麻母 (卷二十・四三二七)

の如くあちらこちらに数多く用いられているのによつても、之を窺ひ知る事が出来るであらう。この事は安我(卷十四・三四〇三、卷十五・三五八〇、卷二十・四五〇五)河泊(卷十四・三四一三、卷十五・三六〇五、卷十七・四〇二一)物能(卷十四・三四二九、卷十八・四〇六三、四一二八)烏梅(卷十七・三九〇二、三九〇三、卷十八・四一三四、卷二十・四五〇二)楊奈疑(卷十四・三四九一、三四九二、卷十八・四〇七一)などの用例に見ても、特に慣用的にある語に限つて使用せられたものと思はれるのであり、借音中心の時代にあつて、一方にあつては、実字の平易な文字を散在せしめるのと共に、他方においては虚字の中にもその文字の持つ固有の意義を利用してそれを仄かに見せせようと試みてゐるものも少くないのであり、そこに句は消ちのやうな働きをさせてゐるやうに思はれるのである。かくの如く一字で用の済む所をその文字はその詞のある一部分の音を現すに過ぎないものとし、その後他の文字を補ふ事によつて、はじめてその一語を現すやうなものがかかりに用ゐられてゐるのである。これらの文字はたとへその中の一音を現すに過ぎないものとは言つても、その文字本来の意義と全然無関係ではありえない筈である。ここにその文字は借音としてその文字本来の訓の一部の音を現すものではあつても、その場合のその文字の意義の句

ひ出るのを隠すべくもないのである。ここに借音としての役目だけでなく、その文字本来の意義の二重写しとして作用する結果ともなるのである。この事は意字としての漢字本来の運命でもあるが、万葉人は借音中心の時代にさへ、その借音として用ゐた文字においても意字としての漢字の性質を巧みに利用してゐるものと思はれるのである。

猶和我・安我・河泊・物能・烏梅・楊奈疑などの用字については、我・河・物・梅・楊などの文字から一字一音式に書き改められたのではないかと（註三）の疑も武田祐吉博士によつて提出せられてゐる。

しかしこの事は単に巻十四のみの現象ではないのであり、巻五にも巻十五にも巻十七・巻十八・巻二十にもいくつもその用例を見出しうるのであり、しかもある特定の文字に限つて屢々繰返して使用せられてゐるのを見れば、慣用的な用法であつて、そこにその文字をちりばめる事によつて、そのものの意義をも仄かながら匂ひ出させようとかへしてゐる表記者の苦心の跡を見逃しえないのである。この事は彼の漢文式の表記法が記紀の名残として正訓中心の時代にも永く用ゐられてゐたが如く、借音中心の時代にあつても、僅かの文字に限つて慣習的に本来の姿を仄かに見せながら用ゐられてゐたものと考へられるのである。猶借音中心の用字の中にあつても、正訓の文字を少しづつ交へ

てゐるのは、十四の巻のみに見える特殊な現象ではなく、他の巻々にもいくらかもその例を見出す事が出来るのであつて、これを以て原本の姿をわづかに留めてゐるものとは考へられないのである。即ち

巨礼也己能名爾於布奈流門能宇頭之保爾多麻毛可流登
布安麻乎等女杼毛（卷十五・三六三八）

毛美知葉能知里奈牟山爾夜杼里奴流君乎麻都良牟比等
之可奈思母（卷十五・三六九三）美夜古弊爾多都日知
可豆久安久麻底爾安比見而由可奈故布流比於保家牟
（卷十七・三九九九）

保里江欲里水乎妣吉之都追美布禰左須之津乎能登母波
加波能瀨麻字勢（卷十八・四〇六一）

左刀妣等能見流目波豆可之左夫流兒爾佐度波須伎美我
美夜泥之理夫利（卷十八・四一〇八）

須美乃江能波麻末都我根乃之多婆倍己和我見流乎努能
久佐奈加利曾禰（卷二十・四四五七）

などの如く借音中心の歌の中にあつても、平易な文字は之を正訓のままで使用する事もかなり行はれてゐるのであつて、意字としての漢字の本質はいくら借音中心の時代となつても拭ひ去る事は出来ないものであり、寧ろそこに重点を置くやうな効果をも發揮するものあつた事は前にも述べた所である。

従つて私は十四の書式を以て正訓のものから書き改めたものとみるよりは、それは直ちに書記の時代を物語つてゐるものと考へたいのである。中には

伊豆乃字美爾多都思良奈美能安里都追毛都芸奈牟毛能
乎美太礼志米梅楊(三三六〇)

の如く米・梅・楊の三つの植物名を配した戯れ書きまで行はれてゐるのを思へば、卷十四も借音を中心としてはゐるにしても意字としての漢字本来の性質をどこまでも利用しようとした人の手に成つた事だけは言へるであらう。

家持などの用字に徴するも、一字一音の用字の中にも正訓をちりばめたものは少くないのであつて、そのために卷十四の正訓中心のものから書き換へられたものとは考へられないのである。

四

更に虚字の利用は一首の中において見られるばかりでなく、近接の歌との間に於いても亦行はれてをり、一入その視覚的な効果を發揮する結果ともなつてゐるのである。

例へば卷八の山上憶良の七夕の歌十二首の中の
天漢伊刀河浪者多多爾杼母伺候難之近此瀬乎(一五二)

四)

袖振者見毛可波之都倍久雖近度為便無秋西安良禰波

(一五二五)

玉蟾鬚髻所見而別去者毛等奈也恋牟相時麻而波(一

五二六)

天河浮津之浪音佐和久奈里吾待君思舟出為良之母(一

五二九)

などの間にも「浪」と「波」とがそれぞれ実字と虚字として用ゐられてをり、天漢の趣を示すのに有効に利用せられてゐるものとも考へられるのである。或いは卷八に大宝元年辛丑冬十月太上天皇大行天皇幸紀伊国時歌十三首の次に収められた後人の歌二首

朝裳吉木方往君我信土山越濫今日曾尚莫零根(一六八〇)

後居而吾恋居者白雲棚引山乎今日香越濫(一六八一)

を見ても前者にあつては実字「君」に対して、虚字の「我」を接せしめて仄かに「我」を匂はせ、後者の実字「吾」に對せしめてゐるのである。又卷十夏相聞寄花の中に収められた

吾社葉憎毛有目吾屋前之花橘平見爾波不来鳥屋(一九〇)

九〇)

霍公鳥来鳴動崗部有藤浪見者君者不来登夜(一九九一)

などの如きも、前者にあつて「橘」に対して「鳥屋」を以てしてゐるのは、後者の「霍公鳥」を呼び出す作用をさへしてゐるやうにも考へられるのであつて、前者の「鳥屋」に対するに後者に「登夜」と変化させてゐるのと共に、二首に亘つての用字の視覚的効果を期待したものと見るべきである。又

左小牡鹿之妻問時爾月乎吉三切木四之泣所聞今時来等霜(二二三二)

天雲之外鴈鳴從聞之薄垂霜零寒此夜者(二二三二)

なる二首の間には「シモ」を前者は虚字により、後者は実字によつて相對せしめてゐるのであり、更に

於保吉美能美許等可之古美伊蘇爾布理字乃波良和多流知知波波乎於伎豆(卷二十・四三二八)

夜蘇久爾波那爾波爾都度比布奈可射里安我世武比呂乎美毛比等母我母

奈爾波都爾余曾比余曾比豆氣布能日夜伊田豆麻可良武美流波波奈之爾(四三三〇)

なる三首の中にあつて、「波波」を思はせる「母」なる虚字を二度までも真中の歌に於いて反覆して用ゐてゐる所にも、前後の歌に「波波」を歌つてゐるのと相呼応してゐるが如くであり、しかもそこには「母」「我母」なる文字を続けて用ゐてをり、後の歌に「美流波波」と詠まれてゐる

のと合せ考へる時、この歌の「美毛比等」の「母」^{はは}である事、「我母」^{わがはは}である事を強く希求してゐるものとさへ考へられるのである。

正訓中心の時代には戯音戯訓の如く文字を楽しんで用ゐてゐるものさへ見受けられるばかりか、同一文字を繰り返して強調したり、つとめて異つた文字を示して変化を求めようとしたものもある。

この事は実字についてばかりでなく、虚字の末にいたるまで強く意識して使用せられてゐるのである。従つて意字としての漢字の効用はそこに極度に發揮せられてゐるものとも言へるのであるが、とかく忘れられがちの虚字の中にも、或いは実字と對比してその趣を附加してゐるばかりでなく、虚字のみによつて実字以上のはたらきを敢てしてゐるものさへ少くないのである。しかもこの事は一首の中においてばかりでなく、近接の作との間にも一入その視覚的な効果を期待してゐるやうな作もあるのである。従来とかく忘れられてゐた虚字の文学的効用について考へ、実字の用法と共に、些か万葉集用字の視覚性を強調してみたのである。

註一 国語・国文昭和八年一月号参照

註二 「上代国文学の研究」所収の「束歌を疑ふ」(三七二頁)

を参照。